

## 受賞にあたって

地域に残る貴重な歴史遺産の再生・活用を真に地域にとって必要なものとして後世に残す為にはどのようにすれば良いか、また我々がそのことを通じて「公的なもの」の価値の創出に深く係わることの意味が問われ続けたプロジェクトでありました。Ⅰ期工事の完成から6年の歳月を経て、昨年、念願でありましたⅡ期工事である金庫棟の再生が、厳しい経済情勢の中にも竣工を迎え、一応のハードの完成をみる事ができました。

「旧日銀岡山支店を活かす会」設立以来13年の活動の節目に、この度日本建築学会賞（業績）受賞の評価をいただきましたことは誠に光栄であり、受賞者一同大変嬉しく思っております。

近代遺産の活用にあたり、民間を信頼し、その意見を尊重しようとした行政の慧眼と革新性、「活かす会」以来の市民と共に活動した建築家が、施設が生まれ営まれる全てのフェーズに持続的に関わることで、公共空間のつくられ方に新たな可能性を見出したこと、市民団体による文化芸術活動の多面的展開など、それぞれの立場での協働と、時には格闘を通して、これまでの箱物行政には見る事の出来ないハードとソフトの確かな繋がりが生まれたものと考えています。

改修にあたっては、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて、所謂文化財の修復的作業としては扱わないこと、既にあるものを壊さず最大限保存し、新たに付加される要素のデザインを如何に考えるかを課題としました。古典主義とモダニズムについて考えを巡らせるなかで、これらを対比的に捉えるのではなく、モジュールやプロポーションなどを熟考することにより、そのなかに歴史的繋がりを見出すことで、既存空間が単なる過去の遺産として相対化されるのを妨げ、時間の連続性を生むものと考えました。このような信念から、新旧が同調する響きを持ち、新しくより生き生きとしたものに甦るよう願い検討を重ねてまいりました。

開館以来、ホール運営は順調に推移し、ここにきて古い歴史遺産が新たな社会的役割を得て、地域社会の中に確実にその地歩を固めてきたと感じております。それを可能にしたのは地域のコミュニティの情熱とロマンが持続するところざしとなって、粘り強くプロジェクトを支えてきたからだと思えます。今回の受賞の喜びをこの事業に参加した全ての人々と分かち合い、これを終着点にすることなく、更なる地域づくりが促進されることを期待します。

地方自治も新しい時代を迎えようとしている今日、市民・建築家・行政の一体的活動による我々のこの十数年間の取り組みのプロセスが、地域における公共資本の再生・継続の一つの手法として確立、波及されればこれにまさる喜びはありません。（文責・佐藤正平）